

JICA海外協力隊OV(OB・OG)向け

クロスロード

CROSSROADS

2024 | 別冊



特集

海外で、国内で、活躍する
協力隊員たち

世界とを
日本を
変える力



JICA海外協力隊60周年

世界と日本を 変える力



撮影地：ウガンダ（カグルロック）
人物：大石和希さん（ウガンダ／コミュニティ開発／2021年度7次隊）

ご挨拶

JICA海外協力隊OV(OB・OG)の皆さまへ

平素よりJICAボランティア事業へのご協力を賜り誠にありがとうございます。

1965年に開始された本事業は、おかげさまで来年60周年を迎えます。2020年には、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、全世界の隊員が一時帰国を余儀なくされました。その後、徐々に派遣を再開させていただき、24年10月末時点で1,568人の隊員が74カ国で活動するまでに回復しました。また、12月で累計派遣隊員数が5万7,000人を突破する見込みです。皆さまからさまざまな形でお力添えを頂きましたこと、改めてお礼申し上げます。

60周年記念のテーマは、「世界と日本を変える力」です。これは、協力隊員が世界のさまざまな課題に取り組むと共に、日本社会にも変革をもたらす存在であることを多くの方に知っていただきたいという思いからです。一人ひとりの隊員の活動は小さなものかもしれませんが、60年間の積み重ねの中で、大きな変化を国内外にもたらしてきたと思います。今年開催されたオリンピック・パラリンピックでは、協力隊員から指導を受けた選手たちが多数活躍しました。また、国内でもたくさんのOVの皆さまが、災害支援、地域活性化、多文化共生社会づくりなどの分野で活躍してくれています。来年11月には60周年記念式典の開催を予定しています。皆さまにもぜひご参加いただけますと幸いです。

昨年6月の開発協力大綱の改定を踏まえ、JICAとしてOVの皆さまの社会還元を周知・支援すべく取り組み

を進めております。昨年から開始した「帰国隊員社会還元表彰」は、皆さまのご協力により第2回目を開催させていただきました。新しい取り組みとしては、OVの「起業支援プロジェクトBLUE」を開始し、伴走支援を受けたOVが国内外での起業に向けて動きだしています。また、派遣中および帰国後の隊員を応援するための「JICA海外協力隊応援基金」を立ち上げさせていただきました。これらの取り組みを通じてお会いしたOVの皆さまの情熱に私自身も感銘を受け、今年9月には書籍「GLOBAL INNOVATORS」を出版させていただきました。

世界が複合的危機にある中、協力隊事業の重要性はますます高まっています。今後も、皆さまが築き上げてくださった途上国の皆さまとの信頼関係を維持・発展させ、更には日本国内からも頼られる協力隊を目指して邁進していく所存です。OVの皆さまにおかれましては、海外に挑戦するこれからの協力隊員および国内で頑張る仲間を引き続き応援いただきますと幸いです。

今年は能登半島地域で震災・豪雨被害が発生した年でもありました。被害に遭われた皆さまに心よりお見舞い申し上げます。また、現在も被災地でボランティア活動に従事されているOVの皆さまにはこの場を借りて感謝申し上げます。

最後になりましたが、皆さまのご活躍を祈念し、JICA海外協力隊に対する変わらぬご支援をお願い申し上げます。2024年OV(OB・OG)向け『クロスロード』発行にあたってのご挨拶とさせていただきます。



独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局長

たちばな ひで はる
橘 秀治

1994年 大学卒業後、金融機関勤務
1997年 青年海外協力隊に参加
〈インドネシア／市場調査／1996(平成8)年度3次隊〉
1999年 国際協力機構(JICA)入構
2010年 米国事務所次長
2013年 人間開発部基礎教育第二課長
2016年 企画部総合企画課長
(2018年～JICA開発大学院連携準備室副室長兼務)
2019年 総務部審議役
(2020年～企画部イノベーション・SDGs推進室長兼務)
2021年 総務部審議役／次長
2022年12月 青年海外協力隊事務局長に就任

Photo=阿部純一(本誌)

JICA海外協力隊 派遣現況

(2024年10月末現在)

- は現在、隊員が活動中の国(74カ国)
- は隊員が派遣されていた国

2024年10月末現在、派遣国数は74カ国で1,568人のJICA海外協力隊員が活動中です。派遣中隊員の合計は昨年23年10月末と比べ1,004人増え、累計人数は延べ5万6,996人に達しました。20年に新型コロナウイルス感染症拡大の影響により全世界の隊員が一斉に帰国することになりましたが、派遣人数は、順調に以前の規模へと回復が進んでいます。

※表とグラフの数値は2024年10月末現在の延べ人数
 ※一般：青年海外協力隊/海外協力隊 シニア：シニア海外協力隊
 日系一般：日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊 日系シニア：日系社会シニア海外協力隊



派遣国別隊員数(派遣中)

国名	一般	シニア
欧州地域		
セルビア	8	
中東地域		
エジプト	20	
チュニジア	11	2
モロッコ	37	1
ヨルダン	16	
アフリカ地域		
ウガンダ	23	1
エチオピア	9	
ガーナ	41	
ガボン	10	1
カメルーン	10	
ケニア	40	1
ザンビア	28	1
ジブチ	13	
ジンバブエ	11	
セネガル	32	
タンザニア	23	
ナミビア	10	
ベナン	33	
ボツワナ	22	2
マダガスカル	19	
マラウイ	42	
南アフリカ共和国	5	
モザンビーク	33	1
ルワンダ	35	

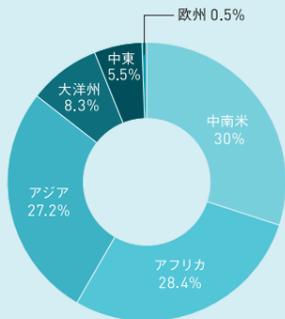
国名	一般	シニア
アジア地域		
インド	21	
インドネシア	40	
ウズベキスタン	17	1
カンボジア	23	
キルギス	32	
ジョージア	8	1
スリランカ	24	
タイ	30	4
タジキスタン		2
ネパール	10	3
バングラデシュ	2	
東ティモール	24	
フィリピン	14	
ブータン	22	4
ベトナム	36	
マレーシア	22	3
モルディブ	3	
モンゴル	40	5
ラオス	33	2
大洋州地域		
キリバス	1	
サモア	7	
ソロモン	15	1
トンガ	13	1
バヌアツ	15	
バプアニューギニア	10	
パラオ	23	2
フィジー	18	3
マーシャル	7	3
ミクロネシア	9	2

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
中南米地域				
アルゼンチン		7	6	2
ウルグアイ		7		
エクアドル	29	3		
エルサルバドル	22			
キューバ		1		
グアテマラ	22			
コスタリカ	18			
コロンビア	16	5		
ジャマイカ	11			
セントルシア	12			
チリ	9	2		
ドミニカ共和国	12	1	6	
ニカラグア	17			
パナマ	15	2		
パラグアイ	20	3	9	1
ブラジル			56	1
ペリズ	13			
ペルー	40	1		
ボリビア	37	1	1	
ホンジュラス	33			
メキシコ	19	11		

合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	1,395 (572/823)	91 (72/19)	78 (32/46)	4 (2/2)	1,568 (678/890)
累計 (男性/女性)	48,084 (25,265/22,819)	6,712 (5,420/1,292)	1,645 (638/1,007)	555 (256/299)	56,996 (31,573/25,417)

※括弧内は男女の内訳(男性/女性)



地域別派遣人数の割合

※割合は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100となりません。



表紙の説明

①山本大貴さん(カメルーン/コミュニティ開発/2021年度3次隊・北海道出身) ②今井奈保子さん(スリランカ/村落開発普及員/1993(平成5)年度2次隊・静岡県出身) ③1967年3月、羽田空港から出発する隊員たち ④佐藤良雄さん(セネガル/養殖/1983(昭和58)年度2次隊・東京都出身) ⑤岩村華子(旧姓 大野)さん(パラグアイ/青少年活動/2002(平成14)年度1次隊・神奈川県出身) ⑥山根かれんさん(ラオス/コミュニティ開発/2023年度4次隊・山口県出身) ⑦金子洋三さん(エチオピア/天然痘監視員/1972(昭和47)年度1次隊・広島県出身) ⑧森 佑一さん(ヨルダン/環境教育/2014(平成26)年度3次隊・香川県出身)

出身都道府県別隊員数(派遣中)

都道府県	一般	シニア	日系一般	日系シニア	合計
北海道	57	2	5	1	65
青森県	13		2		15
岩手県	10				10
宮城県	20		1		21
秋田県	8		1		9
山形県	11	1			12
福島県	18				18
茨城県	25	2			27
栃木県	18	1			19
群馬県	23				23
埼玉県	75	5	4		84
千葉県	44	3	4		51
東京都	189	10	5	1	205
神奈川県	88	7	4		99
新潟県	32	3	2	1	38
富山県	14		1		15
石川県	14	1			15
福井県	2	3	2		7
山梨県	11				11
長野県	27	1	3		31
岐阜県	27	4	1		32
静岡県	49	2	3		54
愛知県	73	7	3		83
三重県	13	2			15
滋賀県	16		1		17
京都府	42		4		46
大阪府	86	5	4	1	96
兵庫県	67	10	8		85
奈良県	13	1			14
和歌山県	18		1		19
鳥取県	6				6
島根県	7	1			8
岡山県	27	2	1		30
広島県	23	1	2		26
山口県	15	1	1		17
徳島県	8	2	2		12
香川県	9	1			10
愛媛県	12		1		13
高知県	7	1			8
福岡県	53	1	3		57
佐賀県	7		1		8
長崎県	13	2			15
熊本県	23	1	2		26
大分県	15	3	1		19
宮崎県	17	2	1		20
鹿児島県	18	1			19
沖縄県	31	2	4		37

JICA海外協力隊OV(OB・OG)向け クロスロード

CROSSROADS

2024年OV(OB・OG)向け

CONTENTS

- 3 ご挨拶
- 4 JICA海外協力隊派遣現況
- 6 [特集]
海外で、国内で、活躍する協力隊員たち
世界と日本を変える力
- 11 JICA海外協力隊応援基金
- 12 第2回 JICA海外協力隊
帰国隊員社会還元表彰 受賞者が決定!
- 15 JOCV BOOKs 協力隊経験者による本
- 16 起業支援プロジェクト BLUE
- 17 LinkedIn公式アカウントに登録しよう!
- 18 OV会リスト
- 20 JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ
- 21 能登半島地震の現場で活躍するOV
- 22 OV News
- 24 この現役隊員に注目!
アルゼンチンで相撲隊員として活動

【凡例】この号におけるJICA海外協力隊の隊員の表記は、2016年度1次隊以前の隊次は和暦を併記しています。

2016年度2次隊以降：氏名(派遣国/職種/西暦隊次)
2016年度1次隊以前：氏名(派遣国/職種/西暦(和暦)隊次)

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。
※本誌記事内の「OV」は、「Old Volunteer」の略で、OB・OG両方を指します。

【クロスロードについて】

「クロスロード」は、JICA海外協力隊員が活動を円滑に行うための情報などを提供する現役隊員向けの通常号を年10回、帰国隊員に向けた情報を提供するOV向け別冊を年1回、これからJICA海外協力隊を目指す方に向けた情報を提供する応募者向け別冊を年1回発行しています。JICA海外協力隊ウェブサイトでも公開しています。

編集・発行：独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局

▶ウェブ版はこちら
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>





特集

海外で、国内で、活躍する
協力隊員たち

世界とを 日本変える 力

2025年で60周年を迎えるJICAボランティア事業。通算で約5万7,000人のJICA海外協力隊員が世界各国で活動に取り組み、また、帰国後もそれぞれの立場で国内外の社会に貢献してきた。そんな取り組みの一端を特集でご紹介したい。

Text = 三澤一孔 (P6-9)、飯淵一樹 (P10 本誌) 写真提供 = ご協力いただいた各位



17品種の種子管理探り 8カ月間、連日観察

食糧増産が課題となっているアフリカでは、JICAなどが長年にわたって稲作分野の協力を進めてきた。ウガンダは拠点国の一つで、技術協力プロジェクトと共に、協力隊員による取り組みも日々続いている。山崎るうさんはそのバトンを受け継ぎ、2023年から活動を続けている。

配属されているのは、ウガンダ国立作物資源研究所の穀物部門。同研究所に派遣されているJICA専門家と相談するなどして始めたことの一つが、品種ごとの種子の休眠期間のデータを取ることであった。「ウガンダの気温は一年中23～25℃程度で、水さえあればいつ種まきをしても3～4カ月後には収穫できます。そのため、三期作のできる一部の地域では収穫したもみを種子としてすぐ田畑にまくこともあるのですが、それがまだ休眠中の種子であった場合、何kgもの種子や労力が無駄になることもあります。それを防ぐために必要な、現地の品種の休眠期間のデータがそろっていませんでした」

水を張らずに畑で作る陸稲を含む17品種について、休眠期間を調べるため、各100粒のうち何粒が発芽しているか、8カ月間、毎日確認した。「任地から首都へ行く時も、

友人の家に泊まりに行く時も、種を持ち歩いて毎日欠かさず記録を取りました」。

着任から1年過ぎた頃からは、研究所の近隣農家を訪ねるようになった。「最初は農家と研究所の田んぼの状況の差に戸惑ったのですが、話を聞いてみると、農家には農家の理由があることもわかってきました」

例えば、種まき。研究所では、稲が育った時に歩きやすく、除草作業が楽になるからと、一列に植える「条植え」を勧めていた。しかし、現地の農家のように種を一面にばらまくやり方をすると、稲が隙間なく育ち、雑草が生えにくいというメリットもある。また、まっすぐに植えるには、ひもを張って作業する必要がある、そのために人を雇う経済的負担も大きかった。山崎さんは、農家と話して理由や事情も知った上で、「こうしたほうがいいよ。なぜなら…」と説明することを意識するようになった。そして「農家の人たちにはなぜその方法がいいとされるのかきちんと説明しますが、それを押しつけることはしないように気をつけています」。

歴代隊員たちの成果の上に コメ増産の取り組みを継続



山崎るうさん
ウガンダ/食用作物・稲作栽培 / 2022年度4次隊・千葉県出身
大学時代、アジアやアフリカの農業を学ぶ。大学連携での協力隊参加が決まったが、コロナ禍で待機を余儀なくされる。茨城県の農業法人に就職してコメ作りなどを学ぶ中で農業の魅力を再認識。ウガンダへの派遣が再開となったことから、2023年4月から現地でも活動している。

受け継がれる取り組み 農家を回ってインパクトを実感

農家を訪ねるようになって、実感したことがある。それは、これまで稲作栽培の分野に携わってきた隊員が残したインパクトだ。隊員から直接指導を受けて稲を条植している農家もあり、人によっては隊員の名前をしっかり覚えていたり、隊員からももらった写真を飾っていたりもする。「私が堆肥についての研修をしたいと話すと50人くらいの農家が集まってくれました。これも、これまでの隊員たちが良い結果、良い印象を残してくれたからだと思います」



圃場にまいて土壌改良などを行うため、もみ殻を加熱して炭化した「くん炭」を作るなど、さまざまな取り組みに挑戦してきた

米作り協力の拠点、ウガンダには、米作りに関わる隊員による「コメ分科会」があり、コロナ禍以前の隊員がまとめた「コメ隊員お助けブック」も受け継がれている。その中では、「農家も忙しいことを理解し、訪問時はできるだけ時間を取らないように」「ジュースなどの手土産を持参する」「少しでもいいので現地語を覚えていく」など実践的な留意点も紹介されていて、派遣前の山崎さんや他国の隊員たちも参考にしてきた。

今、山崎さん自身も野菜隊員やコミュニティ開発隊員らと定期的に集まり、分科会活動に取り組んでいる。目下、コミュニティ開発など米作りが専門ではない隊員が稲作技術の普及に関わる際、農家にわかりやすく教えられるように、稲の植え方や栽培の仕方についての動画を製作中だ。

さらに残りの任期に向けては、配属先の近隣農家と共に収穫後の稲わらと鶏ふんを混ぜて堆肥を作る試みを進めている。「化学肥料だけを使い続けた場合と、堆肥も使った場合では、将来的な土の肥沃度が違っていきます。研究所で8年ほど比較栽培を行っている圃場があり、葉の色から違いは一目瞭然です」と山崎さん。まずは近隣の稲作農家に研究所に来てもらい、実際に違いを見せたり、堆肥について学んでから堆肥の作り方の研修に参加してもらったりしているが、実施してから成果が見えるのは数年後だ。それでも自分の活動が将来に続いてくれればとの思いで、取り組みを続けている。



聞き取り調査のため近隣農家を訪ねる山崎さん

識字率向上を目指して 図書館の活性化に取り組んだ隊員時代

現在、故郷の千葉県八街市で中高生の居場所をつくる活動に取り組んでいる太田蒔子さん。その原点は、協力隊時代の経験にあった。

配属されたのはソロモンのイザベル州教育局。「識字率向上を目的にした読書推進」という要請だったが、多くの小さな島で構成されるソロモンは「海が道路」という環境である。自由にボートを使えるわけではない太田さんには、教育局のある州都ブアラから移動できる場所は限られていた。

そこで太田さんが取り組んだのは、教育局と同じ建物内にある小さな公共図書館を充実させ、会議などで教育局に来る各地域の小学校長らに図書館の様子を見てもらうこと。まずは乱雑に置かれているだけだった本を分類・整理し、「今月は植物に関する本の特集」など毎月のテーマを決めて展示したり、好きな本を選んでゲーム感覚で書評の競い合いをする「ビブリオバトル」を毎週開催したりした。

さらに、日本で勤務していた企業に寄付を依頼して新しい本を購入すると、利用する子どもは大きく増えた。校長

たちから「我が校でも取り組みたい」と教育局に要請がでて予算がつくようになるなど、取り組みが実を結ぶように。「ソロモンの地方部ではテレビやインターネットが未普及なので外の世界を知る機会が少なく、見たことのないレンガの建物やスポーツカーの写真が載った本を、子どもたちが目を輝かせながら食いつくように見ているんです。そういう面白いものが図書館にあると教えられたことは良かったと思います」

そして、活動の中で州都以外の地域を訪れる機会も徐々に増えていく中で、ソロモンの社会環境に魅力を感じた太田さん。「伝統的な村社会で、コミュニティの大人たち全員が子どもを見守って育てているのはすごく良い環境だと感じました。古き良き時代の生活という印象で、これを日本で再現したいという思いを頭の片隅に置いて帰国しました」



ソロモンでの隊員時代。学校図書館の整備を手伝ってくれた子どもたち

ソロモンで見た 「見守り社会」をモデルに 地域で中高生の居場所づくり



おおた まきこ
太田蒔子(旧姓 服部)さん
ソロモン/青少年活動/2017年度4次隊・千葉県出身

両親が共に協力隊経験者で、当時の隊員仲間が家に来るなど、協力隊が身近な環境で育った。大学卒業後は図書館業務に関わる企業で勤務する中で、「何か新しいことをしたい」との思いから協力隊に現職参加。帰国・復職を経て、青少年のための居場所づくりに取り組もうと退職してNPOのプログラムに参加。2023年から中高生の居場所「ナッツアップ?」の運営を始め、24年に一般社団法人子どものみらい開塾を設立。

帰国後、日本の子どもに向けて活動 「話を聞く」を基本に居場所づくり

帰国後は復職して2年ほど会社員として働いた太田さんだったが、退職して教育系NPOによるユースセンター立ち上げのための起業プログラムに参加。同NPOが運営するセンターの一つで働きながら、ノウハウを学んだ。半年ほどたった頃、JR八街駅に程近い建物を提供してくれる人が見つかり、中高生たちの居場所として「ナッツアップ?」をオープンしたのが2023年4月のことだ。

現在、ナッツアップ?は週3回開所している。「元々、あまり対象を絞らず単に中高生向けのフリースペースとして開放するつもりだったのですが、実際に運営を始めてみると、家庭環境の問題など、さまざまな課題を抱えた子どもが多くやってきました」。

例えば、親の再婚相手と合わない子や、きょうだいたち

の世話に追われるヤングケアラーなど、家で居づらさを感じ、やがて学校でも浮いた存在として居場所を失ってしまった中高生たちだ。ナッツアップ?の開所時間中は自習をしたりボードゲームをしたりと自由に過ごすことができ、太田さんやスタッフが常駐して不安に思っていることや悩み、家庭や社会への不満などに耳を傾けることもする。「誰かと話すことで憂さ晴らしになる子もいます。私たち大人はあくまでも見守りの立場で、話を聞くのが基本ですが、深刻なケースの場合には、行政機関につないで対応したこともあります」

また、栄養のある食事を十分に食べられていない子がいることから、同じ建物内に入っているカフェの協力で、手作りの冷凍おにぎりや野菜スープを自由に食べられるように用意している。費用は、子ども食堂向けの助成金を受けて賄っている。「一番つらく感じるのは、来ていた子が居場所の外で問題を起こしてしまった時」と太田さんは言う。「根は良い子でも、そういうことがあると彼ら自身も傷つきますし、周囲の見方が一層厳しくなってしまいます。そうならないようにと、この場所をやっているつもりなのですが…」



ナッツアップ?では特にプログラムは設けず、遊んだり自習したりと自由に過ごせる

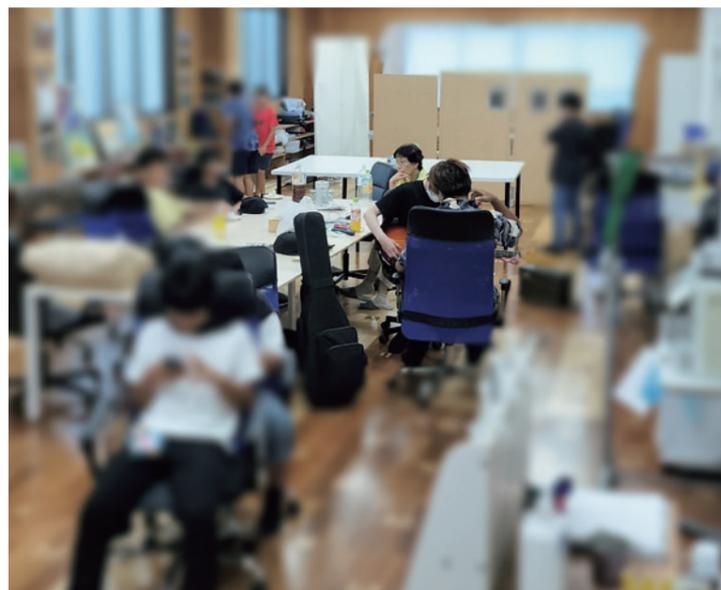
助成金に頼らない取り組みへ 「BLUE」で起業やビジネスを学ぶ

現在の大きな課題が運営資金。やって来る子たちの間に利用料を払える、払えないという格差を作らないようお金は取らず、運営資金はほぼ助成金で賄っている。しかし、それがいつまでも続くものではない。別の形で収入を上げ、運営を回していかないと、と考えている時、協力隊経験者向けの起業支援プログラム「BLUE」を知り、参加を決めた。「BLUEでは、同じようにビジネスの立ち上げに関心のある仲間と出会い、長年ソーシャルビジネスに携わっているプロから3カ月間、起業に必要なノウハウをみっちり学ぶこ

とができました。どうしてその活動をやりたいのか、本当にニーズはあるのか、実際に成り立つのかなどを考えて事業計画を作るところまで伴走してもらうことができました」

BLUEで考えた事業は、高校を卒業してすぐ就職を希望する生徒が就職先とのミスマッチを極力避けられるよう、インターン体験などを通じて企業を知るプログラム。学校や教育委員会、人材を確保したい企業などの費用負担で実施する仕組みで、この事業収益を、ナッツアップ?の運営事業にも活用しようと考えている。目下、25年の実現を目指して準備を進めている。「ナッツアップ?に来ていた子どもが就職のことは大いに関心があるはずですし、この場所を利用して企業とのマッチングなどのイベントを行うこともできるでしょう。両事業が相互に関わっていくことになると思います」

帰国後の社会還元に向けた道筋として、再び海外を目指すことも有力な選択肢だが、「日本国内でも、途上国と同じように困っている人がいて、やりがいのある活動があります」と話す太田さん。「私の最終目標は、ソロモンの村のような見守り社会をつくること。これから取り組みが拡大していろいろな世代がこの場所を利用するようになった時も、子どもたちが居場所を見失わないように、ということをお忘れずに続けていきたいです」。



午前から午後にかけては学校に行けない中高生を受け入れ、15時以降は、中高生全般に開放する



夏休みの流しそうめんイベントのため、竹林のある家に頼んで竹を切る。企画は子どもたちの自主性に任せて、必要な時には大人が関わるようにしている

帰国後も続く社会貢献

各地でOVが取り組む事業

特集
世界とを
変える
力

OЙMO (オイモ)

おがたみすず
緒方美鈴さん
キルギス/体育/2019年度1次隊・熊本県出身
織物やアクセサリーの製販について知識ゼロながら、協力隊からの帰国後に日本でキルギス雑貨の販売にチャレンジした緒方さん。現地に足を運んで職人との交渉を重ね、独自に立ち上げたブランドが、キルギス伝統の文様を意味する言葉にちなんだ「OЙMO (オイモ)」だ。緒方さん自身はキルギスに拠点を移しているが、派遣国への協力を続けたいと望むキルギスOVらによる助けもあり、ECサイトでの販売やイベント出展など国内での運営・展開を続けている。最近では、キルギスで現地スタディツアーを企画したりと、取り組みの幅を広げている。



OЙMOのホームページへ▼
<https://www.oimojp.com/>



過去のクロスロードでの緒方さんの記事はコチラ▼
(クロスロード2023年10月号/PDF版の4ページに掲載)
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/202310/index.html>



jam tun (ジャムタン)

たがとみこ
田賀朋子さん
セネガル/コミュニティ開発/
2014(平成26)年度2次隊・岡山県出身



隊員時代から布の端切れでリユース製品を作ることに取り組んできた田賀さんは、帰国後も活動を発展させて、セネガルのプリント布による衣類・雑貨を現地で作製して日本で販売する事業を立ち上げた。地元岡山県を拠点に各地のポップアップストアなどへの出展を行うほか、客にオンラインで布地や型を選んでもらい、現地でオーダーメイドの服を仕立てるといったサービスも行っている。



Jam tunのホームページへ▼
<https://jamtun.com/>



過去のクロスロードでの田賀さんの記事はコチラ▼
(クロスロード2023年4月号/PDF版36ページに掲載)
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/202304/index.html>



キウイフルーツ カントリー Japan

ひらのこうし
平野耕志さん
ザンビア/村落開発普及員/2011(平成23)年度4次隊・静岡県出身



静岡県掛川市でキウイ農園を営む平野さんが掲げる「人の楽しむ畑」というコンセプトは、ザンビアの人々と農地の関わりを見て得た発想だ。単なる観光農園ではなく、畑でのパーベキューやキャンプ、茶摘みやキウイ収穫などの各種体験から得た有機資源を農業に活用する地球に優しい循環型農業を行い、自治体と組んで県外から掛川市へ修学旅行を誘致するなど地域を巻き込んだ活性化にも注力。80種類以上のキウイを栽培しており、季節ごとに常時2、3種類が食べられるほか、オンラインでの通販にも対応している。



キウイフルーツカントリー Japanの
ホームページへ▼
<https://kiwicountry.jp/>



過去のクロスロードでの平野さんの記事はコチラ▼
(クロスロード2024年1月号)
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/202401/pickup_01_30/



「JICA海外協力隊応援基金」受け付け中！ 法人寄付第1号・トクスイコーポレーションに 協力隊への期待を伺う

2024年、協力隊員を支援する新たな制度として「JICA海外協力隊応援基金」が設立されました。このほど、(株)トクスイコーポレーションの徳島洋武社長と海外合弁会社の佐々木宣之社長に、当基金を通じて寄付を決めた理由や、協力隊経験者への期待を伺った。

株式会社トクスイコーポレーション

福岡県に本社を置く1924年創業のグループ企業で、主力事業は冷凍水産物の加工・輸入・販売。国内外に拠点や提携工場などを有し、1974年にインドネシアで合弁会社「PT DWI BINA UTAMA (以下、ウタマ社)」を設立してエビのトロール漁を開始し、2020年には同国に加工工場を立ち上げている。これまでに複数のOVが採用されて国内外で活躍してきた。



PT DWI BINA UTAMA
社長
ささきののぶき
佐々木宣之さん
グアテマラ/漁具漁法/
1994(平成6)年度2次隊
(株)トクスイコーポレーション
2000年入社

今年、トクスイコーポレーションは創業100周年、ウタマ社は創業50周年を迎えましたが、インドネシアでの事業がここまで続いたのは共存共栄の精神があるからこそだと感じています。事業の目的は現地の水産資源を日本に供給することですが、常に現場が一番大事です。立場を超えて現地の人々とコミュニケーションし、一緒に汗をかき、一緒に成し遂げていく。そういう意味では、協力隊の精神と一致する部分が非常に多いのではないかと思います。

徳島社長：現在、弊社では計4名のOVが勤務しています。過去に在籍していた方々も含め、協力隊を経験した方々は自己解決力が優れた方が多い印象です。特に海外の事業所では、その場で決断を迫られることが多くありますが、常に適切な判断をし、日頃から現地の方々とも仲良く節度を持って仕事を推進してくれるので、非常に信頼しています。海外で課題解決に貢献したいという気持ちを持った若者を応援し、弊社に応募してくれる協力隊経験者を増やしていきたいとの思いもあり、「JICA海外協力隊応援基金」を通じて協力隊を応援しよう決めました。



(株)トクスイコーポレーション
代表取締役社長
とくしまつるたけ
徳島洋武さん

佐々木社長：私は1994年度派遣のグアテマラ隊員ですが、協力隊員は苦労を苦労と思わない人が多いと感じます。人種や文化的背景や生活環境が違う中でいろいろな悩みや葛藤に直面しながらも、楽しみながら一つ一つ解決に向けて動いていける強さがあります。私は現在、インドネシアのウタマ社の社長として、200人のローカルスタッフと働いていますが、協力隊時代に培ったメンタリティは常に必要とされますね。



ウタマ社で事業所長を務める鈴木寿典さん(マダガスカル/コミュニティ開発/2018年度2次隊)(株)トクスイコーポレーション2021年入社

JICA海外協力隊応援基金とは？

次世代を担う協力隊員たちの任国での活動や、帰国後の社会課題解決への取り組みを応援する機会として、広く寄付金を募ることで、JICAボランティア事業への参画の一つの方法として立ち上げられた。想定される用途は以下のとおり。

- ① 派遣中の隊員への支援
- ② 帰国後隊員への支援
- ③ その他(OVのネットワーク維持・発展など)

詳しくはこちら▼
<https://www.jica.go.jp/activities/schemes/partner/private/kifu/kyoryokutai.html>



JICA×三井住友信託銀行による「遺贈セミナー」が開催

JICAと三井住友信託銀行は9月7日に三井本館にて共催で広く一般の方を対象に「遺贈セミナー」を開催しました。個人が遺言によって遺産の全部、または一部を特定の団体などに寄付する「遺贈寄付」は、人生の最後に自分の「想い」を残す方法として関心が高まっており、セミナーではJICA海外協力隊応援基金を含めたJICAの寄付メニューについての紹介もありました。JICAへの遺贈寄付にご関心のある方はJICAホームページよりご連絡ください。

第2回 JICA 海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰

受賞者が決定!

JICAが協力隊経験者の社会還元の機運を高め、よりよい社会の実現を目指して行っている「JICA 海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰」の第2回受賞者が2024年4月に決定し、6月に大賞決定と表彰式が行われました。受賞した6人の受賞理由とコメントを紹介します。

大賞・アントレプレナーシップ賞

無料食料配達と居場所づくりを通じて
子どもの貧困問題解決を目指す

栗野泰成さん

エチオピア/体育/2014(平成26)年度2次隊・鹿児島県出身
一般社団法人チョイふる 代表理事



〈受賞理由〉

食料の無料配達などを通じて、孤立しがちな困窮家庭とつながり、各家庭に必要な情報を提供しながら、行政や専門機関の支援につなげている。地域住民や福祉の専門家と連携して、多くのボランティアが参加しやすい仕組みを構築し、そのノウハウを地域を越えて他の団体にも伝えている。日本の貧困状態の子どもの課題解決を目指す社会的インパクトの大きい取り組みとして評価された。

栗野さんからの受賞コメント

父親の母親への暴力や貧困に苦しんだ自身の生い立ちの中で、「選択格差」という課題を感じてきました。既存の支援制度はあるのに、その情報に手が届いて選択できる人と、できない人の格差です。そして協力隊で赴任したエチオピアで、手足を切断され物乞いをさせられている子どもたちの存在を知ったことをきっかけに、「自分はまだ恵まれていた。これからは日本の子どもたちが選択肢を持てる社会を目指していきたい」と思いました。

帰国後、子どもの貧困問題解決を目指して、働きながら事業をスタートし、3年目に東京都足立区を拠点に団体を設立しまし

た。「チョイふる」という団体名には、経済的に困難を抱える子どもたちが「チョイス(選択肢)を「フル」(たくさんある)に感じられる社会をつくりたいという思いが込められています。多くのセーフティーネットがあるにもかかわらず、日本社会でいまだに子どもの貧困問題が減らないのは、頼れる存在がなく、既存の支援にたどり着けないことが大きな要因です。本来あるはずの選択肢を少しでも身近にすることが、私の使命です。

現在、食料配達を通じて孤立しがちな家庭とつながる「食料支援」、オンライン・オフライン両方で実施する子どもの「居場所支援」、SNSを使った生活相談支援「繋ぎケア」の3つを柱に活動しています。支援対象ごとの「電子カルテ」を作成して各家庭と伴走しながら、一人でも多くの子どもたちに支援を届けたいと活動しています。

また、会員制コミュニティ「こどもリンクサポーター」などの仕組みを通じて、高校生から年配の方までたくさんの方々が参加してくれていて、皆さんと一緒に地域の課題をどのように解決していくか、日々模索しています。将来は足立区で取り組んでいる活動が全国に広がっていくように、全国の都道府県の団体と連携して子どもの貧困問題を解決できる仕組みをつくってきたいです。

左: 食料配達を通じて困窮子育て家庭とのつながりをつくらせている「あだち・わくわく便」には多くのボランティアが参加して、食料の仕分け作業から配達、各家庭の情報収集を行っている (Photo=ホシカワミナコ)

右: 「あだちキッズカフェ」では子ども食堂に遊びの体験をプラスして、家でも学校でもないサードプレイスをつくり、困窮子育て家庭を支える活動を行っている (写真提供=栗野泰成さん)



Text = 新海美保 写真提供 = 栗野泰成さん (P12プロフィール)、小柳真裕さん (P13プロフィール)
Photo = ホシカワミナコ (P13浅野さん、P14江川さん、香川さんプロフィール)、阿部純一(本誌) (P13東さん、P14式典)

アントレプレナーシップ賞

〈受賞理由〉

協力隊で派遣されたカンボジアで、幼稚園教員へのトレーニングの必要性や教材不足を感じ、2016年に団体を設立。提携する幼稚園の教員に向けたワークショップを開催してきたほか、1,200点以上の教材を作り、教員が無料で使えるよう、公式ウェブサイトや各種SNSで公開している。ウェブサイトは10万人以上がアクセスする人気サイトに成長。リソースが限られている途上国において有効なアプローチであり、社会的インパクトが大きいと評価された。

※ ACNC = Australian Charities and Not-for-profits Commission...チャリティや非営利活動を扱うオーストラリア政府設立の機関。非営利団体の設立登録や事業・組織運営への評価を行っている。



小柳真裕さん

カンボジア/青少年活動/
2014(平成26)年度1次隊・福岡県出身
ACNC認定TukTuk for Children理事(※)
Rermork for Children アドバイザー

小柳さんからのコメント

オーストラリア出身の夫と共にカンボジアで幼児教育支援をしています。教材を運ぶ三輪バイク「TukTuk(トゥクトゥク)」を団体名にしました。カンボジアの幼児教育のカリキュラムを読み込み、海外からカンボジアに来ている幼児教育の専門家や現場の関係者と協力しながら、保育現場で必要とされる使いやすい教材を作っています。今後は、将来、現地の方々だけで活動を続けられるよう、幼児向けの教育番組の制作や、教員が考えた教材を共有できる仕組みを整えていきたいです。

地域活性化賞

〈受賞理由〉

隊員時代にバングラデシュでラジオ体操づくりに携わった経験から「参加型の体験コンテンツが人を動かすきっかけになる」と考え、映画留学や地方創生事業の仕事などを経て起業。地元・岐阜県瑞浪市にクラフトビールの醸造所を設立し、地域の特性を生かしたビール造りや、ビールを通じた地域の魅力発信をしている。人口減少や高齢化が進む町の関係人口拡大や移住促進に貢献し、地域活性化のモデルになり得る活動として評価された。



東恵理子さん

バングラデシュ/コミュニティ開発/
2013(平成25)年度3次隊・岐阜県出身
株式会社東美濃ビアワークス 代表取締役

東さんからのコメント

現地の方々とはバングラデシュ版ラジオ体操をつくった経験から、ラジオで放送して終わりの“番組”制作だけでなく、持続性のある参加型コンテンツの重要性に気づきました。2020年に起業して、地域の食材や伝統工芸とコラボして東美濃ならではのビールを造り、ビアバーも開設しました。将来はここを釜戸町のツーリズム拠点にしたいと考えています。空き家対策チームの活動も軌道に乗り移住者が増えていきます。今後もビールを通じて地域をPRしながら人とのつながりを増やしていきたいです。

地域活性化賞

〈受賞理由〉

静岡県牧之原市の廃校を活用して地域活性化ビジネスに取り組む。協力隊時代に学んだ「地域活動では多面的な取り組みが重要」という視点を生かしながら、町を元気にする多様なアイデアを次々に具現化。宿泊サービスや外国につながる子どもたちへの日本語教育、スマート農業、イベントを通じた町づくりなど、地域の人々を巻き込んで共に発展していく取り組みが地域活性化のモデルになると評価された。



浅野拳史さん

ルワンダ/理科教育/
2015(平成27)年度1次隊・静岡県出身
株式会社マキノハラボ 代表取締役
YAMBI CONNECT LLC. CEO

浅野さんからのコメント

新卒で参加した協力隊では小中一貫校に派遣され理科を教えていました。ルワンダ語を必死で学んで現地の人々と意思疎通を図る中、友人ができて、スタディ・ビジネスツアーなどを行うYAMBI CONNECT LLC.の起業に至りました。ルワンダつながりでマキノハラボの事業も手伝うようになり、現在2社を運営しています。どちらの会社も協力隊で学んだように、地域の方々と一緒に成長することが第一歩。皆さんに協力していただきながら事業を広げています。

ボランティア活動を通じた社会還元実践賞

〈受賞理由〉

IT企業を経て協力隊に参加し、ブルキナファソで簡易埋め立て場を造るなど、環境省や自治体が動きかけをつくった。帰国後、協力隊の仲間と共に起業して海洋ごみの回収装置を開発し、香川県小豆島で海洋ごみの回収に取り組む。海洋ごみ問題の解決は世界的にも重要な課題であり、地域の漁師や住民、自治体、企業などたくさんの方々と協力関係を築きながら取り組んでいる点が評価された。



えがわ ゆき
江川裕基さん

ブルキナファソ/環境教育/
2017年度2次隊・埼玉県出身
NPO法人クリーンオーシャンアンサンブル
代表理事

江川さんからのコメント

縁もゆかりもなかった小豆島で地元の方々との関係性を築けたのは、協力隊時代に現地の方々と同じ釜の飯を食べた仲良くなった経験が生かされています。NPO立ち上げ当初は資金調達も組織運営も手探りでしたが、学生時代にバックパッカーとして世界のごみ問題を目の当たりにして以来、模索してきた活動にしっかり向き合っています。

多文化共生賞

〈受賞理由〉

協力隊員としてマラウイの病院で活動後、成田赤十字病院に復職。仕事をしながら大学院に通い、「外国人患者に関わる看護」について研究し専門性を高める。国際診療支援室の専任看護師として、外国人患者やその家族への医療支援を続けてきたほか、病院内の医療従事者に向けて異文化看護に関する現場レベルの研修や講義を行うなど病院関係者の指導を行っている。



かがわ さとる
香川沙由理さん

マラウイ/看護師/
2012(平成24)年度3次隊・千葉県出身
成田赤十字病院 看護師

香川さんからのコメント

2015年の復職後に高度治療室に所属し、20年からは国際診療支援室の業務も兼務しています。宗教上の理由で食べられない食材があったり、消灯後も大声で電話したり、外国人患者の対応が難しいと感じる職員は少なくありませんが、職員の不安や誤解を減らし、外国人の方が安心して医療を受けられる環境をつくるのが私の役割です。今後は協力隊のネットワークも活用しながら、他の医療機関とも連携していきたいです。

第2回 JICA 海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰 式典を開催

式典は2024年6月7日にJICA本部(麹町)にて開催され、49名の応募者から選出された6名が活動内容をプレゼンし、選考委員による審査が行われ大賞が決定した。式典後はネットワーキングイベントが開催され、OVが起業した6団体の事業紹介などが行われた。



チョイふるの活動をプレゼンする栗野さん



ネットワーキングイベントの様子

JOCV BOOKs

協力隊経験者による本

OVが執筆、登場する本は、派遣中の体験談や、その後の人生のエピソードが詰まった貴重な情報源。2023年から24年にかけて出版された3冊をご紹介します。



JICA海外協力隊から社会起業家へ 共感で社会を変える GLOCAL INNOVATORS

編著：橋 秀治
発行：文芸社
定価：1,760円(本体1,600円+税)

JICA青年海外協力隊事務局長 橋 秀治

〈インドネシア/市場調査/1996(平成8)年度3次隊〉
大学卒業後、金融機関勤務を経て、1997年に青年海外協力隊に参加。市場調査の職種でインドネシアの南スラウェシ州バル県の5つの村の総合開発に取り組む。99年国際協力事業団(現JICA)入籍。米国事務所次長、総務部審議役、企画部イノベーション・SDGs推進室長などを経て、2022年12月より現職。

国内外で社会課題に挑むOVの実践例を紹介 協力隊経験の社会還元に向けたヒントに

JICA海外協力隊員として海外経験を積み、帰国後は地域の視点も持ちながら「グローバル」×「ローカル」で社会課題に挑む協力隊OVたちの取り組みを紹介する本書。1998年度から2017年度まで、派遣時期も職種もさまざまな7人が登場する。

テクノロジーを生かして開発途上国の課題に挑むケースや、日本で誰もが暮らしやすい社会づくりを目指すケース、農業と国際協力を結びつけて地域活性化に寄与するケースなど、各自の活動内容は多岐にわたる。派遣を経て取り組みを始めた経緯から、現在の活動の様子、共に活動する関係者のコメントといったリアルな実践ストーリーは、帰国後の社会還元のヒントを得たい人にも、これから協力隊参加を考えている人にも参考となるはずだ。

本書で取り上げられているOV

- 坪井 彩さん〈ウガンダ/コミュニティ開発/2017年度3次隊〉
井戸の維持管理システムでアフリカの水問題に挑む
- 徳島 泰さん〈フィリピン/デザイン/2012(平成24)年度1次隊〉
3Dプリント技術で低価格・高品質な義肢装具を提供する
- 奥 結香さん〈マレーシア/障害児・者支援/2014(平成26)年度2次隊〉
「ひとりぼっちをつくらない」インクルーシブな社会を目指す
- 新居みどりさん〈ルーマニア/青少年活動/1998(平成10)年度3次隊〉
誰もが暮らしやすい社会に向け、日本に暮らす外国人を支援する
- 田谷 徹さん〈インドネシア/食作物・稲作/1997(平成9)年度2次隊〉
インドネシアの若者を受け入れ、農業を通じた多文化共生に取り組む
- 栗野 泰成さん〈エチオピア/体育/2014(平成26)年度2次隊〉
食材配達や居場所づくりを通じ、困難を抱える子育て家庭を支援する
- 矢島亮一さん〈パナマ/村落開発普及員/1998(平成10)年度3次隊〉
農業研修を軸に日本と世界をつなぎ、地域を活性化

図書館で外国人に 対応するための実践書 「やさしい日本語」の基本を 知るにもおすすめの一冊



図書館のための 「やさしい日本語」

編著：阿部治子、加藤佳代、新居みどり
発行：日本図書館協会
定価：1,100円(本体1,000円+税)

【共著者の中のOV】 新居みどりさん

〈ルーマニア/青少年活動/
1998(平成10)年度3次隊・京都府出身〉
1999年4月、青年海外協力隊員としてルーマニアへ赴任。2001年4月の帰国後、早稲田大学・同大学院で多文化共生について学ぶ。東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター(現多言語多文化共生センター)のコーディネーターを経て、11年にNPO法人国際活動市民中心(CINGA)に入職。各プロジェクトのコーディネーターを統括する立場で活躍している。

国際協力の世界を 俯瞰して知るための入門書 最新動向も盛り込んだ 第2版が発刊



国際協力 アクティブ・ラーニング ワークでつなぐグローバルキャリア (第2版)

著：佐原隆幸(拓殖大学名誉教授、元JICA職員)、徳永達己
発行：弘文堂
定価：2,200円(本体2,000円+税)

【共著者の中のOV】 徳永達己さん

〈タンザニア/在庫管理/
1985(昭和60)年度1次隊・神奈川県出身〉
拓殖大学国際学部長/国際学科教授、博士(工学)、技術士(建設部門・都市及び地域計画)。青年海外協力隊員としてタンザニアで活動し、(一社)国際建設技術協会、(株)エイト日本技術開発を経て現職。

Break the Line, Unleash your Entrepreneurship

あの日異国の地で抱いた、「いつか世界を変える力になる」という志。私たちは、JICA海外協力隊を経て得られた強烈な経験と新しく生まれた価値観にこそ、社会の課題を解決するビジネスのアイデアが眠っていると思います。決して簡単ではない世界の、日本の、地域の難題に、挑みたい。利益の追求だけでなく、ビジネスのあり方を共に考えたい。JICA海外協力隊経験者に「社会起業」という選択肢を。そんな想いを込めてJICA海外協力隊起業支援プロジェクトBLUEをつくりました。

BLUE

JICA海外協力隊 起業支援プロジェクト

太田蒔子さん(ソロモン/青少年活動/2017年度4次隊) 太田さんの起業活動については本誌P8で詳しく紹介しています。

あなたの想い、今こそ世界を変える力にしよう。

詳しくはこちら



<https://blue.jica.go.jp/>

JICA海外協力隊LinkedIn公式アカウントに登録しよう!

青年海外協力隊事務局では、派遣中隊員とOVのネットワーキングや、隊員の活動支援を目的に、ビジネス特化型SNS「LinkedIn(リンクトイン)」を運用しています。JICA公式の非公開グループとして「帰国後の社会還元における情報共有」「災害ボランティア」「起業支援プロジェクトBLUEオンラインコミュニティ」があり、多くのOVが参加して交流を広げています。非公開グループには、LinkedInで隊員情報を登録していただくことで参加が可能になります。

【公式】JICA海外協力隊アカウントはこちらから。
<https://www.linkedin.com/company/jicajocv/>



帰国後の社会還元における 情報共有グループ



協力隊経験を生かした社会還元活動に関心を持ち一歩を踏み出そうとしている方、在住外国人支援や地域のボランティア活動に参加している方など、帰国後の活動情報を共有し、隊次や年齢を超えてつながっていけるグループを目指しています。



<https://www.linkedin.com/groups/14138230/>

災害ボランティアグループ

災害ボランティアに関心を持ち一歩を踏み出そうとしている方、すでに災害支援の現場で活躍しているOVの方などの情報を共有し、相互に知識を深めていくことで災害発生時にスムーズに動きだしができるようなグループを目指しています。



<https://www.linkedin.com/groups/14109850/>

起業支援プロジェクト BLUEオンラインコミュニティ

社会起業・兼業を志す、もしくは、実践している隊員・OVを中心としたグループ。活動紹介や情報交換、JICA関係者や社会起業・兼業を実践・支援する団体などからの情報提供、社会起業・兼業に関するマッチングの機会を提供しています。



<https://www.linkedin.com/groups/14054083/>

私たちが LinkedInを活用しています!

川崎芳勲さん

株式会社NeBonga 代表
ウガンダ/コミュニティ開発/
2014(平成26)年度1次隊



LinkedIn、活用させてもらっています!私はBLUEの起業伴走プログラムに参加し、ウガンダで映像制作会社をつくるプランを作成しました。このプランを実現するべく、LinkedInでも情報収集しています!先日は、LinkedInのBLUEコミュニティで教えてもらった、JICA研修員の方々との意見交換に参加することができ、事業を考える上で大変参考になりました!他のSNSに比べて、「話してみたい!」と思った人と気軽につながれる点もありがたいです。引き続き活用したいと思います!

栗野泰成さん

一般社団法人チヨイふる
代表理事
エチオピア/体育/
2014(平成26)年度2次隊



私もLinkedInへは定期的に投稿するようにしています。JICAのグループ内もそうですが、個人のフィードで団体の活動を投稿したり、自分の考えを発信したりもしています。中には、仲間募集の投稿がきっかけとなって、活動に参加してくださった方もいました。LinkedInは実名でさまざまな方とつながれるので、とても興味深いです。もっといろいろ試してみようと思います!

河内 毅さん

日本も元気にする
青年海外協力隊OB会 会長
グアテマラ/森林経営/
2002(平成14)年度1次隊、
2005(平成17)年度0次隊



当OB会では、多くの皆さんとつながり、情報交換や交流を行うなかで、新しい活動のヒントや連携が生まれることを大切にしています。LinkedInでは、「社会還元」「災害ボランティア」「BLUEコミュニティ」から、OB会のイベント情報を発信しています。各地で特徴的な活動をしているOVの話の聞けたり、交流イベントにも参加することができますので、ぜひ投稿をチェックしてみてくださいね!皆さんのご参加、お待ちしております!

JICA海外協力隊OV会リスト

「派遣国」や「在在地」など、共通項で結ばれたJICA海外協力隊経験者で構成されるOV(OB・OG)会の最新(2024年10月現在)の情報をまとめました。

派遣国別

派遣国が同じJICA海外協力隊経験者などで構成されるOV会

地域	派遣国	団体名
中南米	エクアドル	エクアドルOV会
	ドミニカ共和国	ドミニカ共和国OV会
	パナマ	青年海外協力隊パナマOV会
	ボリビア	JICAボリビアOV会
中東	ホンジュラス	ホンジュラスOV会
	イエメン/ほか	JOCV イエメン+UNV(国連)ネットワーク
	シリア	シリアOV会
アフリカ	ヨルダン	ヨルダンネットワーク
	ウガンダ	ウガンダ隊OV会
	エチオピア	青年海外協力隊エチオピアOB/OG会
	ケニア	協力隊ケニアOB・OG会
	タンザニア	ワスワヒリの会
	ニジェール	ニジェール有志の会
	マダガスカル	青年海外協力隊マダガスカルOV会
	マラウイ	日本マラウイ協会
	ルワンダ	青年海外協力隊ルワンダOV会
	サモア	青年海外協力隊サモアOB会
大洋州	トンガ	JICA海外協力隊トンガOV会
	ブルガリア	ハイデプブルガリア
欧州	ルーマニア	ルーマニアOB会
	中国	青年海外協力隊中国同志会
アジア	スリランカ	スリランカ同志ネットワーク
	ネパール	協力隊ネパール会
	バングラデシュ	バングラデシュOVの会
	東ティモール	JICA海外協力隊 東ティモールOB・OG会
	フィリピン	協力隊フィリピンOB/OG会
	ベトナム	ベトナムOV会
	マレーシア	青年海外協力隊マレーシア会
	ラオス	青年海外協力隊ラオスOV会

分野別等

職種・活動領域などが同じJICA海外協力隊経験者などで構成されるOV会

分野(大)	分野(小)	団体名
教育	環境教育	青年海外協力隊環境教育OV会
	開発教育	開発教育を考える会
	学校教育	全国OV教員・教育研究会
	学校教育	関東教育支援ネットワーク
	学校教育	京都府OV教員研究会
	学校教育	大阪教育ネットワーク
	学校教育	兵庫OV教員研究会
	幼児教育	JICA海外協力隊幼児教育ネットワーク
スポーツ	バレーボール	JOCVバレーボール会
	看護師	JOCV看護職ネットワーク
保健・医療	栄養士	青年海外協力隊栄養士ネットワーク
	リハビリテーション	JOCVリハビリテーションネットワーク
その他	無線	JOCV-NETアマチュア無線クラブ
	地域づくり等	日本も元気にする青年海外協力隊OB会
	国際交流・協力	NPO法人 都市計画・建築関連OVの会

シニア

JICA海外協力隊や日系社会JICA海外協力隊の経験者などで構成されるOV会

分野	団体名
総合	NPO法人シニアボランティア経験を活かす会
在在地等別	札幌SVくらぶ
	千葉県JICAシニアボランティアの会
	静岡県JICAシニア海外ボランティア協会(SOVA)
	JICA中部コスモスクラブ(東海地区シニアボランティアOV会)
	JICA近畿シニアボランティアOV会
JICA兵庫シニアOV会	
分野別	ICT海外ボランティア会

在在地等別

同じ都道府県等の在在者や出身者などで構成されるOV会

地域	県名等	団体名	
北海道・東北	北海道	青年海外協力隊北海道OB会	
	北海道	青年海外協力隊北海道道東OB会	
	北海道	青年海外協力隊道南OB会	
	北海道	青年海外協力隊北海道後志OV会	
	青森県	青森県青年海外協力協会(AOCA)	
	岩手県	岩手県青年海外協力協会	
	宮城県	宮城青年海外協力協会	
	秋田県	青年海外協力隊秋田県OB会	
	山形県	特定非営利活動法人 山形県青年海外協力協会	
	福島県	ふくしま青年海外協力隊の会	
	茨城県	青年海外協力隊茨城県OV会	
	栃木県	栃木県青年海外協力隊OB会	
	群馬県	青年海外協力隊群馬県OB会	
	埼玉県	青年海外協力隊埼玉県OB会	
関東・甲信越	千葉県	青年海外協力隊千葉OB会	
	東京都	青年海外協力隊東京OB会	
	新潟県	新潟県青年海外協力協会	
	神奈川県	青年海外協力隊神奈川県OB会(KOCV)	
	川崎県	かわさきJICAボランティアの会	
	山梨県	山梨県青年海外協力隊協会	
	長野県	青年海外協力隊長野県OB会	
	富山県	青年海外協力隊富山県OB会	
	石川県	石川県青年海外協力隊OB会	
	福井県	青年海外協力隊福井県OB会	
東海・北陸	静岡県	青年海外協力隊静岡県OV会	
	岐阜県	JICAボランティア岐阜県OV会	
	愛知県	青年海外協力隊愛知県OB会	
	三重県	青年海外協力隊三重県OB会	
	滋賀県	滋賀県青年海外協力協会(SOCA)	
	京都府	NPO法人京都海外協力協会(KOCA)	
	大阪府	青年海外協力隊大阪府OB・OG会(ICOPAO)	
	兵庫県	青年海外協力隊兵庫県OB会	
	奈良県	奈良県青年海外協力協会(JOCA-Nara)	
	和歌山県	和歌山青年海外協力協会	
中国・四国	鳥取県	青年海外協力隊鳥取県OV会	
	島根県	島根県青年海外協力協会	
	岡山県	青年海外協力隊岡山県OV会	
	広島県	青年海外協力隊広島県OB会	
	山口県	青年海外協力隊山口県OB会	
	徳島県	徳島県青年海外協力協会	
	香川県	香川県青年海外協力協会	
	愛媛県	愛媛県青年海外協力協会(EOCA)	
	高知県	高知県青年海外協力隊OB会	
	九州・沖縄	福岡県	福岡県青年海外協力協会
		佐賀県	佐賀県海外協力協会
		長崎県	長崎県青年海外協力協会
		熊本県	熊本県海外協力協会
		大分県	大分県青年海外協力協会
宮崎県		宮崎県海外協力協会	
鹿児島県		青年海外協力隊鹿児島県OB会	
沖縄県		沖縄県青年海外協力協会	

その他

出身校等	団体名
酪農学園(大学・短期大学)	酪農学園青年海外協力隊OV会
親子でJICA海外協力隊に参加	NPO法人青年海外協力隊の2世代参加を促進する会

OV(OB・OG)会のホームページや連絡先など、詳しい情報は下記のリンクからご覧ください。
<https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/info/alumni/index.html>



JICA海外協力隊経験者による団体・企業

協力隊OVが立ち上げた団体・企業には、ビジネスや非営利活動を通じた国際貢献や、海外の産品や原料の輸入・販売など、さまざまな分野があります。今回はそのうち、食材や食品の輸入・販売などを行っている団体・企業の一部を紹介します。

JICA海外協力隊経験者による団体・企業(一部掲載)

団体名称(名称の読みがな) 代表者	【事業対象の国/地域】事業概要
NPO法人アブカス 石川直人(スリランカ/環境教育/2002(平成14)年度2次隊)	【スリランカ】ソーシャルビジネスを通じた社会課題解決に注力。現在、視覚障害指圧師の指圧院「Thusare Talking Hands」の運営、持続可能な農業技術の普及および有機食品「Kenko1st」の運営を行う。
株式会社Girls, be Ambitious(ガールズビーアンビシャス) 番匠麻樹(フィリピン/村落開発普及員/2010(平成22)年度2次隊)	【フィリピン】フィリピン産のモリンガやコーヒー、精油などを素材とする食品や化粧品などの企画・輸入・販売に加え、ソーシャルビジネス・コンサルティングを行う。
トゥエンデ 米瀬真奈美(タンザニア/理数科教師/1994(平成6)年度2次隊)	【タンザニア】タンザニア産のコーヒーや布などの販売を通じた同国の障害者への支援および異文化理解ワークショップなどに取り組む。
BUCKLE COFFEE(バックル コーヒー) 石山俊太郎(東ティモール/コミュニティ開発/2014(平成26)年度2次隊)	【東ティモール】東ティモール、ブルンジ、パナマなど世界のコーヒー豆を自家焙煎し販売する。最高品質の「スペシャルティコーヒー」と呼ばれる商品だけを扱う。元々が町工場ということもあり、町工場で使う建材などを使用し建築した店舗となっている。
Vanilla House(バニラ・ハウス) 小瀬一徳(バブアニューギニア/製材/1993(平成5)年度2次隊)	【バブアニューギニア】バブアニューギニアで栽培されたバニラビーンズやカカオ豆などの農産物やその他加工食品の輸入・販売を行う。
有限会社バンベン 坂本毅(中華人民共和国/日本語教師/1991(平成3)年度1次隊)	【中華人民共和国】中華人民共和国・内モンゴル自治区オルドスの砂漠緑化支援を目的に、同地産の岩塩や重曹などの販売を行う。現地では、植林のほか、有機肥料の生産や高付加価値農業の導入など環境と経済の好循環モデルづくりを行っている。
ベレケの村 五十嵐大介(キルギス/家畜飼育/2009(平成21)年度3次隊) 五十嵐真矢加(キルギス/村落開発普及員/2010(平成22)年度3次隊)	【キルギス】千葉県南房総市の「ベレケの村」にて、キルギスで食用や薬用としてなじみの深いキンセンカを栽培。それを材料にしたオーガニックコスメやハーブティーなどを製造・販売。キルギスで手作りされた羊毛フェルト商品や蜂蜜などの食品の輸入販売。
株式会社豆乃木 杉山世子(ジンバブエ/ソフトボール/2000(平成12)年度1次隊)	【メキシコ】メキシコのマヤ系先住民が無農薬・無化学肥料で栽培する「マヤビニックコーヒー」などの輸入・販売を行う。
合同会社Ewako(エワコ) 松本圭太(インドネシア/陸上競技/2013(平成25)年度1次隊)	【東南アジア、中東地域】東南アジア、中東地域を中心とした輸入食材、輸入品の専門店、在日外国人向け、スパイスやアジア野菜、調理器具などの販売を行う。
OIYO from Kyrgyzstan(オイモ) 緒方美鈴(キルギス/体育/2019年度1次隊)	【キルギス】職人たちの手仕事の技術やデザインを受け継ぎ、キルギスの伝統を守ることを目的とした、キルギス発のライフスタイルブランド。キルギスの天然素材を生かして、オリジナルの雑貨や食品などを製造・販売する。オイモとは、キルギスの伝統的な柄のこと。
フェアトレードショップ Teebom(テーボム) 今井奈保子(スリランカ/村落開発普及員/1993(平成5)年度2次隊)	【世界各国】世界フェアトレード連盟などに登録された280以上の生産者団体から生産者を選び、作ってもらったオリジナル食品やオリジナル雑貨を、静岡県静岡市の実店舗とオンラインショップで販売する。
NPO法人コーヒーと生産地と協働する会 古賀聖啓(ルワンダ/果樹栽培/2014(平成26)年度2次隊)	【ルワンダ】ルワンダのコーヒー農園の土壌改良を行い、農家に持続可能なコーヒー栽培を波及させるために設立。あわせて団体を支援するルワンダのコーヒー会社・ファイエマウンテンコーヒーの生豆、焙煎豆の日本での卸も行う。



NPO法人アブカスは有機農産物をスリランカと日本で販売



BUCKLE COFFEEの自家焙煎コーヒー



フェアトレードショップ Teebom



有限会社バンベンの岩塩

OVによる団体・企業の一覧は、下記のリンクからご覧ください。
<https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/info/alumni/socialbusiness/index.html>
 掲載を希望される場合は、青年海外協力隊事務局(jvthd@jica.go.jp)にご連絡ください。



JICA海外協力隊発足60周年記念事業（記念式典・小惑星命名）

青年海外協力隊事務局では、2025年のJICA海外協力隊発足60周年を記念して、「世界と日本を変える力」をテーマに、各種イベントを企画しています。メインイベントである記念式典は2025年11月13日（木）に東京国際フォーラムにて実施予定ですので、楽しみにしてください。また、60周年を記念して小惑星への命名を企画しています。このたび、小

惑星命名ルールに合致する候補の中からOVの皆さまやJICA関係者による人気投票を行いました。その結果を基に、今回の企画のオファーを頂いた日本宇宙フォーラムおよび命名権を譲渡して下さる日本スペースガード協会を通じ、国際天文学連合（IAU）に名称を申請します。最終的な名称は、名称披露イベントにて皆さまに発表します。こちらをご期待ください。

第3回 帰国隊員社会還元表彰の実施が決定しました

OVで、国内外・公私問わず社会課題の解決に取り組んでいる方を表彰する「JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰」の第3回目の実施が決定しました。詳細はJICA海外協力隊HPにてお知らせいたします。自薦・他薦問わず皆さまからのご応募をお待ちしております。これまでの帰国隊員社会還元表彰の結果は以下をご覧ください。

第一回目受賞者情報は  [こちら](#) | 第二回目受賞者情報・表彰式当日の様子は  [こちら](#)

企画調査員（ボランティア事業）の公募が開始されます

2024年度第2回公募が25年1月より開始される予定です。企画調査員（ボランティア事業）はJICAの在外拠点において、主にJICAボランティア事業に携わり、JICA海外協力隊の活動全般をサポートしていただきます。皆さまのご応募をお待ちしております。

募集期間（予定）：2025年1月初旬～25年1月下旬
募集人員：未定
契約期間：2025年10月～26年3月より2年間 

進路開拓 & 帰国隊員向けインフォメーション

「PARTNER」内、帰国隊員用特設ページについて

国際キャリア総合情報サイト「PARTNER」に帰国隊員用特設ページをご用意しています。登録された方は、帰国隊員向けの特別求人との閲覧や、セミナー情報、進路情報へのアクセスが可能です。

PARTNER/帰国隊員
進路情報ページ 

その他の進路開拓支援情報

上記以外にも、協力隊経験を生かしたキャリア形成のための制度や、役に立つ情報を提供しています。詳細はリンク先をご確認ください。

- 進路を探る 帰国後研修（オンラインでの実施）、進路相談カウンセラー/JICA海外協力隊相談役
- 働く 教員・自治体の特別採用枠
- 学ぶ 教育訓練手当、奨学金事業

進路開拓支援の
ご案内 

JICA国内拠点

全国15カ所にあるJICA国内拠点では、JICA海外協力隊経験者を対象とする就職・キャリアアップ・スキルアップのためのセミナーや、国際協力に関連する各種セミナーなどを開催しており、国際協力関連の資料なども閲覧できます。また、全国3カ所にあるJICAの「地球ひろば」では、世界のさまざまな課題や途上国と私たちのつながりを体感できます。

各国内拠点の
所在地・連絡先などは
以下をご覧ください 

OV向け各種インフォメーション

帰国した方へセミナーなどの情報を提供しています 

- 派遣証明書の申請
就職先・教員採用試験・奨学金の申請などで派遣証明書が必要な方は、こちらから発給の申請をしてください。
- 住所変更届・進路現況連絡票の提出
住所・連絡先・メールアドレス・氏名の変更のあった方、また進路が決定した方は届け出をお願いします。
- 帰国隊員の進路状況について
帰国した青年海外協力隊員および日系社会青年ボランティアに対しアンケートを実施し、帰国隊員の進路状況
- OV関連のお知らせ
協力隊関連イベント、OV(OB・OG)会、OVの著書紹介や隊員活動に関する講演などについてご案内しています。

能登半島地震の現場で活躍するOV

日本語が得意でなく、地域との交流が少ない在留外国人をサポート。必要な支援先へつなぐ窓口



なかたに
中谷なほさん
ジンバブエ/料理/2006(平成18)年度0次隊、
ウガンダ/料理/2008(平成20)年度8次隊、
ジンバブエ/料理/2015(平成27)年度9次隊・
東京都出身
中学生時代に北海道で2年間の山村留学をし、高校生時代にはオーストラリアに1年間留学。社会人となり調理師として経験を積んだ後、協力隊に料理職種があることを知って応募。ジンバブエに派遣されたが、現地情勢が悪化し、振替派遣でウガンダへ。帰国後、2009年に石川県珠洲市に移住。協力隊OG4人で能登の魅力を発信する「のとガール」としても活動した。15年には短期派遣で再度、ジンバブエに赴任した。

外国人技能実習生たちにとっての頼れるお姉さん 協力隊経験で身についた、人への興味が根底に

ジンバブエとウガンダで料理隊員として活動した中谷なほさんは、帰国後の2009年から能登半島の珠洲市に移住し、地元の食材を使った手作り菓子の販売や食堂経営、牧場勤務の仕事しながら、日本語指導などを通じて地域に住む外国人技能実習生と友人として交流を続けてきた。

24年1月1日、能登半島地震が起きた時、中谷さんは休暇で隣町の能登町にいた。同町の避難所で二晩を過ごして3日に戻ってみると、震源に近い珠洲の家は半壊の状態だった。「実習生の皆は無事だろうか、何か困っているのではと心配になり、戻った翌日から連絡を取って安否を確かめました。避難所を訪ねると、そこで支援を受けているグループもいましたが、避難所に適応できず、電気や水が止まり、風呂もトイレも使えない寮に戻ったグループもありました。普段は日本で暮らしていても、避難所で放送される支援情報などの複雑な日本語になると理解できず、まわりの人々ともコミュニケーションが取れず、心細かったのだと思います」
震災発生から日数が経つと、水の供給や仮設トイレの設置が始まったが、寮に戻った人々にはやはり情報が伝わっていなかった。実情を知った中谷さんは、知人の実習生たちに必要な情報を伝えるなどのサポートを行いつつ、それまで接点のなかった在留外国人にもつながりを広げていった。「仕事が再開できる目途が立たず、県外へ移らざるを得なかった人や、心的スト



奥能登豪雨の災害時も、中谷さんは現地を訪ねボランティア活動を行った。「輪島市のお宅です。後ろに見えるカーテンの染みまで水が上がってきたようです。独り暮らしのおばあちゃんが、私が住んでいる珠洲のことも心配してくれたので、嬉しさや哀しさが同時に胸に迫りました」(9月6日撮影)

レスもあったのか、帰国した人もいました」。多言語での支援に対応する行政や支援団体の相談窓口も開設されていたため、中谷さんは当初、そうした窓口で連絡するよう促していたが、「後日、聞いてみると、誰も連絡してなくて、義援金などさまざまな支援が受けられていませんでした。知らない人とのオンラインでの相談、言葉が通じない不安などがブレーキをかけているようでした。勤務先の企業の方々も自身のことで手一杯という状況で、彼らには身近で頼れる存在が必要なのだと思います」。

中谷さんは24年5月、JICA北陸センターに誘われ、応募して国際協力推進員の職に就いた。震災から復興するためにJICAができることの調査、地域の外国人支援の推進、能登町役場での復興推進課の業務を主に行っており、それまでの個人としての活動から、仕組みづくりへと幅を広げている。それでも中谷さんの気持ちは変わらない。「私は外国人を“支援”しているとは思っていません。協力隊員時代に他者とコミュニケーションすることの面白さや大切さに気づき、今も身近な外国人と友人として交流する中で、自分にできることを心がけています。今



日本語教室で中谷さんが教えていたクラスのベトナム人とラオス人の友人たちは、珠洲市の中学校へ避難していた。別の日本語教室の先生と共に避難所に入った彼女たちは、支援を受けられていて安心。一番奥は珠洲市在住の協力隊OV(1月11日撮影)



中谷さんが働いていた珠洲市唐笠町の松田牧場は、9月の豪雨によって牛の放牧地が崩れてしまった。地震と豪雨で2回の孤立を経験した(9月27日撮影)

も行政の支援が届きづらい県外にいる人ともつながり続けていて、9月に起きた能登の豪雨災害の時には、逆に私の無事を心配する連絡もあり、お互いに支え合っています。個人同士の信頼関係があっただけで彼らの本当の現状を知り、必要なサポートができるのだと考えています」
8月には、富山県に移動したグループを訪ねて、一緒にピクニックを楽しんだという。「ピクニックには去年も、珠洲市で働く外国人や地域の方々も行っています。その時、きっかけさえあれば、外国人と関係づくりをしていきたい地域住民の方々も少なくないことに気づきました。これからも、時間をかけながら自然と交流が生まれる機会を設けていきたいと思っています」

Text = 三澤一孔 写真提供 = 中谷なほさん

News 1 2004年度1次隊／駒ヶ根訓練所OVが20周年同窓会を開催

2024年6月8日(土)、JICA東京(東京都渋谷区)にて2004年度1次隊のうち駒ヶ根訓練所で訓練を受けたOVが20周年を記念する同窓会を開催し、同期224人中70人とその家族16人が参加した。「20年前に駒ヶ根訓練所で過ごした日々の感動と熱狂が再現され、かけがえのない時間を共有することができました」と話すのは開催実現に尽力した後田剛史郎さん。同期10人ほどのSNSグループでの「記念同窓会があるといいね」という一言をきっかけに、同年2月から準備を始めていた。

国内外に散らばっている同期が一人でも多く集まれるよう配慮したのは、「アクセスの良い場所での開催」と「コストを抑えること」の2つ。航空運賃などが高騰する大型連休や夏休みを避け、かつ1次隊には現職教員が多いことから学校行事が少ない6月

を選択。そして、思い出の地・駒ヶ根をはじめとする複数の候補地から「安価で使用できる講堂があり、パーティも行えて、宿泊施設を併設している」というJICA東京での開催を決めた。

苦労したのは参加者の募集で、訓練所時代の名簿で224人全員にメールを出しても、ほとんど届かなかった。「連絡がついた人から口コミで伝えてLINEグループに招待し、同窓会への参加意向を聞いて出席・宿泊人数の把握などを進めました」。結果、参加者は目標としていた50人を大きく上回る数に。後田さん自身は宮崎県から飛行機を利用して参加し、オランダやハワイ、ベルギー、ペリリーズに住む海外在住者も駆けつけた。

当日は訓練所入所時の自己紹介にならって1人1分間で近況を報告。その他、参加できなかった同期のビデオメッセージや、訓練時代のイベントで各自が披露した余興の再現といった催しがあり、「若い力の歌」の斉唱で締めくくられた。

「最初は照れくさかったのですが、すぐ打ち解けました。帰国後は訓練所時代の結束も失われがちですが、今回作ったネットワークは能登半島地震災害支援の呼びかけにも波及効果を及ぼしていますし、この団結力は日本にとっても財産になると考えています。参加者全員から『ありがとう』と言われ、心底やってよかったと思いました」と後田さん。25周年、30周年記念の同窓会も視野に、まだ連絡の取れない同期へのアプローチを続けている。

うしろだ ごうしろう
後田剛史郎さん
(スリランカ/野球/2004(平成16)年度1次隊・長崎県出身)



News 2 PALM10で首相と駐日大使になった教え子と対面 30年を経た派遣国トンガとの絆

日本と18の太平洋諸島・地域が参加した「第10回太平洋・島サミット(PALM10)」が2024年7月16日(火)～18日(木)に東京都で開催され、林 芳正内閣官房長官夫妻主催の歓迎レセプションと岸田文雄首相(当時)夫妻主催の晩餐会には、大洋州に派遣された10名のOVが参加。各国の首脳や要人と懇談した。

その一人でトンガOVの深川千幹さんは、かつての教え子が首相と駐日大使となってPALM10に参加、30年以上を経て3人での対面を果たした。「自然災害など課題の多い国のリーダーとして一生懸命頑張っている彼らを誇りに思います。教え子がこんなに立派になって隊員冥利に尽きます」とその思いを話す。

深川さんは1987年、佐賀県で初めて現職教員として協力隊に参加し、帰国後30年以上にわたり同県の小中学校教育に携わってきた。定年退職を目前に控えた2022年1月、トンガ沖大噴火に際し、理事を務める地元佐賀のNPO「地球市民の会」で募金活動を展開。支援金を駐日トンガ王国大使館に持参すると、待っていたのは隊員時代にトンガの高校で教えた生徒、スカ・マンギシ大使。感動の再会だった。深川さんはこれを機に地球市民の会を通じてトンガの防災教育や高校生への奨学金事業などに携わっている。

23年に結成されたトンガOV会では、会長も務める。「仕事や子育て、介護などがあり、帰国してからトンガに全く関われずに負い目を感じていましたが、ここへきて一気に動きだして、自分でも驚いています。トンガにはこれからずっと関わってきたいです」。

ふかがわ ちかみ
深川千幹さん
(トンガ/理数科教師/1987(昭和62)年度1次隊・佐賀県出身)



News 3 グローバルフェスタJAPAN2024にOV会など協力隊関連ブースも多数出展

外務省やJICAなどが共催する国際協力イベント「グローバルフェスタJAPAN 2024」が、2024年9月28日(土)、29日(日)の2日間にわたって対面・オンラインのハイブリッド形式で開催された。対面会場である新宿住友ビル三角広場および新宿中央公園ファンモアタイムひろば(水の広場)には、各種参加団体のブースやキッチンカーが並び、両日で5万人近くが来場した。

協力隊OV会ではヨルダンネットワークや日本マラウイ協会、ドミニカ共和国OV会といった国別OV会のほか、JOCV看護職ネットワークのような分野別OV会もブースを出展。また、一般社団法人A-GOALやKESTES、パヌアツ・ナバンガ ピキニニ友好協会など、OVが設立・運営している団体も複数出展し、新宿中央公園のキッチンカーコーナーではOVの元木康貴さん(セネガル/行政サービス/2009(平成21)年度4次隊)が携わるThiès Caféがセネガル料理などを提供した。

出展団体のOVからは「この機会に同じ国のOVが偶然ブースに来てくれることもある」「長年参加していて、毎回多くの人と交流できるのがいい」といった声が聞かれ、会場を訪れた他のOVらと旧交を温める姿も多く見られた。



News 1 駒ヶ根訓練所OV同窓会



1 当日参加した同期隊員とその家族、計86人 2 20年前の余興を再現して沖縄空手の演武を披露するOV 3 訓練所以来初めて顔を合わせる同期も少なくなかったが、「たった79日間ですが同じ志を持って過ごした同期は家族のような特別な存在です」(後田さん)



News 2 PALM10・トンガとの交流

4 スカ・マンギシ駐日大使(左)とシアオン・ソヴァレニ・ファカヴァメイリク首相(右)。いずれも深川さんのかつての教え子で、このたび3人同時の対面を果たした 5 PALM10の催しに参加した大洋州OVたち 6 2022年にトンガで災害が起き、支援のための調査で約30年ぶりに現地を訪れた深川さん



7 日本マラウイ協会(上)と青年海外協力隊ルワンダOV会(下)のブース。協力隊OV会や、OVが中心となって運営する団体の出展は10以上に上った



News 3 グローバルフェスタ JAPAN 2024





道場で稽古をつける今さん。生徒たちは大人になってから相撲を始めた人も多く、女性が4割ほど在籍している点は、日本との違いだという

現在、協力隊唯一の相撲隊員として活動しているのが、今 日和さんだ。アルゼンチン相撲協会に配属され、首都の相撲道場に通う生徒たちの指導を始めて約6カ月がたつ。

「5年以上続けている人もいれば、最近始めた人もいて、レベル差はありますが、基本の技を中心に稽古しています。生徒たちは、疲れてからも集中力を高めて向かっていく根性があるし、私から一つでも多くを学ぼうと真剣に稽古に取り組んでいます」

鯉ヶ沢町で生まれ育った今さんは、小学校1年生の時に相撲を始めました。内気な子だったが、相撲を通じて海外の選手らと交流の輪が広がっていったことで、それが相撲の楽しさの一つとなった。

女子相撲の実業団はないため、大学卒業後は男子の実業団相撲部がある企業に就職して、特例として入部させてもらった。しかし、男性のみの相撲部に所属し、職場の理解を得ながら相撲を続けることにはさまざまな障害があり、今さんは次第に孤独感を募らせていった。

大学の相撲部までは土俵に入ったら男女関係なく、一人の相撲選手として甘やかされず厳しく育てられてきたが、社会に出て女性が相撲を続けることの難しさに直面した。

「好きな相撲を続けるのが難しく、心が折れそうにもなりましたが、それでは今までお世話になった人たちに申し訳ないし、相撲を世界に広げるという夢も実現したい。武者修行のつもりで海外で経験を積むことを決断しました」

JICA海外協力隊応援基金

派遣国で活躍している隊員の活動や、帰国後に社会課題解決に取り組むOVの活動を支援するための基金です。

<https://www.jica.go.jp/activities/schemes/partner/private/kifu/kyoryokutai.html>



協力隊OVの皆様からの応援をお待ちしております！

この現役隊員に注目！



女子相撲を続けることや 異国の組織で活動すること 一つ一つの困難を乗り越えて 相撲を世界に広げたい

Text=阿部純一(本誌) 写真提供=今 日和さん



こん びより
今 日和さん

アルゼンチン/相撲/2023年度4次隊・青森県出身

相撲どころ・青森県鯉ヶ沢町に生まれ、小学生の時に兄の稽古に付き合うようになったことがきっかけで相撲道場に通い始める。以降、世界女子ジュニア相撲選手権大会優勝(重量級)、世界相撲選手権準優勝など輝かしい成績を記録。海外の選手との交流を経験する中で相撲を世界に広めたいという目標を抱き、大学では相撲部に所属しながら国際関係学部で学んだ。卒業後は愛知県の企業の人事部に勤め、同社の相撲部で活動した後、協力隊に参加。

アルゼンチンでは相撲はまだマイナーな競技。今さんは、日本大使館や日本語学校が行うイベントで積極的に相撲のデモンストレーションを行っている。

「一般の方々に相撲を知ってもらい、応援してもらいたい。私もまわりの応援が力につながってきた経験があるので、生徒たちにも同じ経験をしてほしいのです。絶対に失敗するからデモンストレーションに出たくない、と言っていた生徒が、指導によって上達し、四股も立派に踏めるようになるなど、成長を見るのはとても嬉しいことです」

活動の最大の目標は、アルゼンチン相撲協会の組織力を向上させることだ。

「相撲協会はお金や人手が足りないため、良い選手が育っても、国内大会の開催や海外大会への派遣を諦めざるを得ない状況です。相撲の応援者を増やすことに加え、これからは組織の改善もしていきたいです。もちろん、異国の組織の人たちに働きかけるには慎重さが必要で、悩みも多いのですが、私の課題として全力で取り組んでいきます」

今さんには大きな夢がある。相撲をオリンピック種目にするのだ。「今、日本のアマチュア相撲は危機的状況にあって、国体から相撲が外れる危機もささやかれています。日本の伝統競技とはいえ、残す努力をしないと消えてしまうでしょう。存続のためには女性も相撲を続けられる環境づくりや、相撲を世界に広めるためにオリンピックの種目に取り入れられることが必要です。将来、一人の競技者から組織の委員や指導者として成長し、環境・制度面から相撲を盛り上げていくために、アルゼンチンでの活動は最初の試練だと思っています」

住所・連絡先を変更された方へのお願い

青年海外協力隊事務局とOVの皆様との情報共有やクロスロードOV(OB・OG)向けのお届けのため、リンク先より住所・連絡先変更の手続きをお願いします。

<https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/procedures/documents/index.html>



【各種届出の提出先/問い合わせ先】
jvtpc-sinrosien1@jica.go.jp

(青年海外協力隊事務局社会還元促進課)

青年海外協力隊事務局
公式Instagram
JICA海外協力隊のリアル
お見せします



JICA海外協力隊
公式LINEアカウント
シゴト診断、教えて! FAQ
などぜひ活用下さい

